

中国最大の「知識インフラ」 ——中国学術情報データベース(CNKI)

田中 信行

情報のデジタル化は、今や学術の世界にも、怒濤の勢いで侵入し始めたようである。そう言えば、『人民日報』がインターネットでリアルタイムに読めるようになったことに驚愕したのは、もう遠い昔のことのようだ。それよりさらに遠い昔には、中国で重大な事件が起きる度に、『人民日報』の到着を首を長くして待っていた頃があった。航空便で送られてくる『人民日報』は、それでも一週間くらいは待たなければならなかった。そうした経験を長く持つている者にとって、その日のうちに北京で読むのと同じ『人民日報』が読めるということは、まるで夢のような出来事ではなかつた。

しかるに今日の状況はと言えば、いったんパソコンに向かってインターネットを始めるなり、『人民日報』はもとより、あれこれの新聞、情報が氾濫していて、うっかりすると情報の渦に飲み込まれてしまいそうになるほどである。毛沢東や鄧小平の論文、江沢民の演説、党の文献、政府の報告、法律の条文、統計データ、これらのほとんどすべてが、マウスをクリックするだけで目の前に展開する。あまりの便利さ、快適さに、思わずため息が漏れてしまう。

ただしそうは言っても、実際に必要なデータを引き出すには、相当な学習も必要である。まず、目指すところのデータがどこに存在しているか、その所在を探索しなければならぬ。これはと思うホームページに出会ったときは、すかさず「お気に入り」にチェックを入れておくのだ

クリックすると次の段にジャンプします。



図 1

が、いつのまにか「お気に入り」が画面一杯にあふれて、何がなんだか訳の分からないことになってしまふ。整理整頓の必要性を身にしみて感じる始末なのであるが、実行はなかなか容易ではない。

そんな整理べたの者にとって、「中国学術情報データベース」(China National Knowledge Infrastructure / 以下CNKIと略称)(注)は誠にありがたいデータベースである。ここには中国で刊行されているほとんどすべての学術雑誌が詰め込まれているため、いちいち雑誌を整理する必要もなく、必要なときにすぐさま引き出して、読みたい論文に目を通すことができるのである。まさに情報デジタル化時代の恩恵を、あますところなく味わうことのできる、中国研究者にとって不可欠のアイテムであろう。

CNKIは清華大学の企業グループとして知られる清華同方の関連企業によって製作、運営されている学術情報データベースである(<http://www.cnki.net>) (図1)。このデータベースは、学術雑誌のほか、主要な新聞、学位論

- ▼ 『東方』267号より
- 二 中国最大の「知識インフラ」
- ▲ 田中 信行

図2

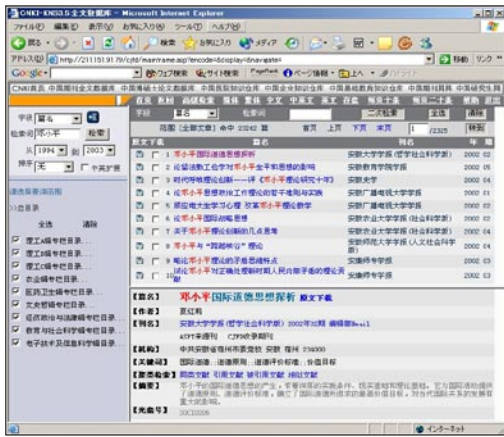


図3



文集、特許情報などいくつかのパッケージに分けて提供されているが、ここでは筆者が実際に利用している学術雑誌のパッケージについて、ご紹介することにしたい。

CNKIは清華同方によって運営されているが、純粹に民間のビジネスとして経営されている事業ではない。データベースそのものは国家新聞出版総署の管理のもとに置かれ、インターネットのサイトは國務院新聞弁公室の認可を得て運営されており、国家事業的の性格を色濃く持っている。その工程は、一九九九年に新聞出版総署が公布した「中国学術期刊（CD-ROM版）データ検索・評価基準（試行）」という法律にもとづいて実施されており、したがって著作権も厳格に管理されている。しかし、そんなことよりわれわれにとって決定的に重要なことは、中国国内で刊行されている学術雑誌のほとんどすべて、約五、三〇〇タイトルが収められており、それらがいつでも自由に閲覧できるという点であろう（詳しくは東方書店のホーム

トップページにもどる

ページを参照）。時期的には一九九四年以降のデータが収録されており、ほぼ一〇年分の蓄積を有するに至った現在では、内容も分量もすこぶる充実したものになっている。

このデータベースの利便性は、いくら強調してもしすぎるということはないときえ思えるほどであるが、そのことは検索システムを利用してみれば直ちに体感できるであろう。たとえば、「鄧小平」という言葉で検索をしてみる場合、著者として検索すれば彼の書いた論文が、タイトル名として検索すれば、タイトルに「鄧小平」を含むすべての論文が、あるいはキーワードという項目で検索すれば、論文のキーワードに「鄧小平」を含むもの、さらに全文で検索すれば、論文の中に「鄧小平」が登場するすべての論文が、たちどころにリストアップされるのである（図2）。その他、雑誌名、発行時期などによっても検索できるし、ジャンルごとに絞って検索することも可能である。場合によっては数千ものタイトルが瞬時にリストアップされる様

は壯観であるが、そのような時はあらためて絞り込んでいくほか対処のしようがない。

本文は「CAJ」という、アドビシステム社の「アクロバット」でおなじみのPDFファイルに似たファイル形式になっているため、画像や図表も含め、冊子体の版面とまったく同じように見ることができ（図3）。必要な部分は、テキストファイルに書き出すこともできるから、資料として一部を切り取って保存しておく場合には大変便利である。もっとも、筆者の見る限りカラーの表示はなく、すべて白黒画面である。あるいはジャンルによってはカラー表示もあるかもしれないが、この点は確認していない。

すべて良いことづくめのようなデータベースではあるが、実際に利用するに当たってはいくつかの問題が存在している。まず、日本国内からアクセスすることには、相当な参入障壁がある。中国国内からのアクセスは、個人的に登録して利用できるようにもなっているが、国外からの場合は個人での登録は認められておらず、研究機関として登録し利用しなければならない。このデータベースが営利事業でないことが、ここでは参入障壁として機能してしまっているのである。次に同じ理由から、利用料金が相当高額に設定されている。同じ研究機関に相当数の中国研究者が集中しているような状況でない限り、この設定料金はかなり重い負担となるため、それゆえに利用できないケースも少なくないであろう。パッケージをさらに分割したりして料金の低額化を図るなど、最も改善を求めたい点である。これらは利用方法に関するものなので、清華同方にも運営方針があつてのことであろうから、今後は国外の利用者の声にも配慮するよう求めていくほかない。

オンラインより低額で利用できる選択肢として、毎月発行されるDVDを購入して、スタンドアロンで利用する方法も用意されている。DVDが手元に保存されるので、オンラインの場合とは異なり、いったん購入したものは永久に利用できるというメリットがある。データのすべてをハードディスクに落として利用するには、相当大きな容量のハードディスクが必要となるが、パソコンに慣れているユーザーには、有力な選択肢であろう。

そのほか、インターネットの技術上の問題としては、スピードの問題が最大のものであろう。テキストファイルとは違い、先にも言ったCAJファイルなのでデータが重く、画像などが多く含まれているファイルのダウンロード

▶ トップページにもどる

の場合は、瞬時に届くというわけにはいかない。それでも通常の回線状況であれば問題なく数秒で完了するが、回線状況が混み合っている場合はかなり遅くなり、たまにアクセスを拒否されたりする場合もある。こうした環境はインターネットにはつきものだが、日中間ではややその傾向が強いような印象である。ただ、東方書店が日本の契約者向けにCNKIのミラーサーバーをたてる予定なので、そうなればこういった問題はほぼ解決されるだろう。

以上のような利用環境なので、現在のところは残念ながら誰でもが簡単にアクセスできるといふわけにはいかない。誰でも自由に利用できるのは、タイトルの検索までなので、たとえば調べたい項目のタイトルをインターネットで検索してから、図書館や書棚にある雑誌を取りに行くというような利用の仕方もあるが、それだけではいかにももったいない。昨年、いくつかの大学でデモがおこなわれたので、すでに実際に体験された方も少なくないであろう。一度体験してみれば、あたかも机上にちよつとしたヴァーチャル図書館が出現したような気分を味わうことができる。この快感を多くの研究者が共有できるようになれば、中国研究が一層発展することは間違いないとさえ、誰しもが確信してしまうのではないだろうか。

【注】中国では「中国学術期刊」の名称で呼ばれるが、ここでは日本での商品名及び一般に通用している略称を使用する。

(東京大学社会科学研究所)